矢板の素材で海辺の春

花フェスタで生け花の大作を出展

長谷川ゆう子さん

◆今回の花フェスタで生け花の大作を出展したのが矢板市茶華道協会の会長をしている長谷川ゆう子さん。

県の担当者から依頼の電話があり、来場してくれた方に楽しんでもらえたらうれしいので引き受けたということでした。

◆前回の大田原で開催した時にも出展しましたが、二度目となる今回のテーマは「海辺の春」。

海によって人は生かされているということ、そして自然の大切さ、山（上流）の環境が下流の海に影響することを認識してもらいたいと考えて作品作りをしました。

◆できるだけ矢板のものを使用するように工夫。貝殻の代わりにエリンギを、そしてリンゴやカンピョウも使いました。一週間前から必要な材料をそろえ、花は花屋さんにあるものだけでまとめました。

◆いわき市出身の長谷川さん。「海のない矢板の人がどう感じてくれるか気にかかりますが、今回も来て花を見て『良かった、綺麗だった！』と感じていただければ嬉しいですね」と話してくれました。

（M）

花フェスタ裏話

■出番を終えたツツジはどうなるの？

せっかく早く咲かせたツツジ。まだまだ花は見頃。塩谷病院、道の駅やいた、市役所ロビーなどで、白やピンクの花で訪れる人を楽しませています。

■花フェスタの花、最後はどうするの？

展示した数々の花。最終日の終了とともに、関係者が剪定バサミを持ち、片っ端から花束にして、一束千円で販売。矢板市ではその売り上げで、震災後一年を迎える被災地に、花や、図書券などを贈るために使う予定です。

【矢板の誇り】おらがまちの芸術家

日本刀の最高峰・正宗を目指して

加藤慎平さん（木幡在住、５５歳）

杉木立の裏手に静かにたたずむ加藤さんの日本刀鍛錬所。作業場の薄暗い土間の脇に、使い込まれた鎚（つち）やふいごなどの道具類が、静かに息づいていた。

（財）日本美術刀剣保存協会主催の新作刀展では、全国に約三百人いる刀工の中から百人前後が出品する。加藤さんは短刀の部門で四年連続で優秀賞を獲得（うちトップを三年連続で受賞）。今や現代刀工を代表する一人だ。

●夢をあきらめきれず

矢板東高校を卒業後、大学に進学するも、作刀の夢をあきらめきれず、十八歳で人間国宝・宮入行平氏に入門。修行半ばで師が死去。兄弟子である山形県羽黒町の上林恒平氏の元でさらに五年間修行。昭和五十五年に文化庁の作刀承認を得て刀工となった。

翌年の（財）日本美術刀剣保存協会主催の新作刀展でいきなり努力賞を受賞し、注目を浴びることに。

●下手を自覚する

初めて出品した刀が努力賞に入賞し、さらに翌々年も入賞。そのため、自分はうまいと思っていたという。しかしその後十余年は賞に恵まれず、不遇の時代を過ごした。そこをどう乗り越えていったのか？

「まず、自分は下手だということに気づいたこと」という意外な答えが返ってきた。

「展示会に出品すると、実際に他の人の作った刀を見たり、写真集を見る機会がありますが、あるとき写真集を見ていて一番下手な刀に見えたのが自分の作品でした。ショックでした」

●上達するために始めたのは

「自分が下手だと気づいたことで、どうすれば良いかが見えてきました。それからは、技術よりも感性を磨くことを心がけました。具体的には絵や書を見て鍛えるために、美術館などを回りました。理屈ではなく、良い物を見ているうちに良いものが分かってくるようになるのです。少なくても本物を見ることが大切です。」そう語る加藤さん。

特に感動した作品をお聞きすると、長谷川等伯の「松林図屏風」と、運慶の彫刻という答えが…。

●目指すものは決まっている。

刀剣史では山城、大和、備前、美濃、相模の五カ国の刀剣に特徴的な作風をそれぞれ「…伝」などと称し、これらを総称して「五か伝」というが、鎌倉時代の名工・五郎入道正宗はこのうちの「相州伝」を完成させた人物。（相模伝とは言わない）

相州伝の魅力は例えれば水墨画の世界だという。加藤氏が目指すものは、この最高峰といわれる正宗に近づいていくこと。そこには、まるで長谷川等伯の描いた水墨画のような世界が待っているのかもしれない。（Y・M）

編集後記

花フェスタは、盛大にしかも立派に開催されたと取材を通じて感じました。ツツジを咲かせる苦労話や、小学生が発表した、ひまわりの葉や、花と太陽との関係などを聞き、自然環境の大切さや、不思議さを改めて感じさせられたイベントでした。花の春はもうすぐそこまで来ています。